鬼人がおまつ

あるところに、むかしに、今で言う税金を納めるようなもので、侍がここから秋田の殿様まで金持って使いで出れば帰ってこねわけだ。途中で、がんど(山賊)がいて。今からたとえれば、オイの母は、あっちから来た人だので、相染森の坂さ、それたとえてねぇ、上りも三里、下りも三里、で険しい道で、一晩過ごさねば、それ向こうさ、行がいねがったどぉ。それで、ある侍が、母さんと父さんと二人さ、男の子七つだがなる子ども一人いだ親が、金持って行く役割当だって、秋田さ使いに出だったどぉ。したっけやっぱりその人もまだ、行きっぱなしで帰ってこねわけだぁ、はぁ。何人もその、相染森の坂ってきづして、上りも三里下りも三里で、そごさ行げば日暮れ方にちょうど坂の下りさ行ぐわけだ。下りさ行げば、川一本あって、その川越すに橋もなんにもねぇ、這って越えねばねがったど。そいで、そごにがんど(山賊)いで、通る人がみな、命とられて帰って来ねって言わったものねぇ。檜山の殿様がらでも遣われて行ったもんでねぇがい。したら、そこの家の父さんも帰ってこながったど。したっけ、その子供がまだ七歳であったたいに、十五になれば、親のかたき取んに行ぐって母親さ常に言って、小さいから一生懸命、剣術が習って、腕磨いたど。その子供、十五になったっけ、「おれ、親のかたき取るために、おいどごそこさ使いにやってけれ」って、お役所さ願い上げだど、子供がね。「おめまだ若げしてだめだって」いうの、「おれ大丈夫だって。この年で親のかたき取って来るために、なんとかおいどご、使いに出してけれ」って。そしたっけ、その子供役所の金いっぺぇたないで、秋田まで届けに行がぁず。その上りも三里、下りも三里の坂、どうしても通らねばならねにゃったどぉ。そいで、母親さも別れ告げて、必ず親のかたき取って来るって行ったわけだ。したっけ、やっぱしその坂、上って下って日暮れ方になったど、その坂の終わりさ行ったば。その終わりさ行けば今度、川一本あるわけだ。川の麓まで行ったら、若いきれいな女の人が真っ赤だ小袖を着て、「腹痛で、腹痛で」って、川端ごろごろ転んであってあったそうだ。その若者が「何している、ここにいで」って、おっきい声、かけたそうだ。侍さ「オレ、今、どこそこさ嫁なって行ったども、舅厳しくて家さ帰って来たけども、こさ来たっけ、腹いでして、腹いでして、うごがいね」って。「いいお薬でもあったら一服けでやらいねが」って。そしたっけ、薬でもあるべがなって、あっちこっち探したっけ、なにか仁丹でもあったもんだが、それほら飲めってやったそうだね。飲んだっけ「良ぐなったか」って聞いたけ、「少しよくなったどもまだ痛い」って。「オレ、今この道初めて来たもんだからこの川の道案内しぇ」って言ったっけ、「おれやっと腹、少しもおさまってきたじい、川さ入れば、まんだ痛でぐなればしがだねって、おいどご負ぶってけれ」ってそう言ったそうだ。「侍なんか、おなごどご負ぶわいね」って言ったど。「んだべども何とかおいどご、負ぶってけれ」って。そしたっけ負ぶっ

たけ、浅せほさ行げば「ほっちゃ行けば深け、深け」ってはぁ。こっち浅せって言うがらこっつぁ行けば、だんだん深げ方さはまるわけだ。「こっち浅せんでねがぁ」って言えば、負ぶわいだ人の話もなんも聞がね、陸まで負ぶって浅せ方が探がして向こうさ越えてドンと降ろしたど。「ここに笠松峠鬼人がおまつというがんどいるったけ、オメだべぇ。おれ今晩父のかたき取るに来たから、オメもそのように支度しろ」って言った。そしたらそのおなごが上の赤い小袖脱いだっけ、下さちゃんとたすきがけしてはぁ、短刀さしてはぁ、ちゃんと戦うようにまかなってであったど、その女がねぇ。「おやおや、見れば十五、六の若者のようだが、なかなかいい度胸だな」って。「んだら、一つ戦ってみるか」って、やったっけ、とにかく身のこなしがいくて、その若者も手強いだけの身こなしがたで、「まず、ひとつ、一服休む」ってあったど、その若者がねぇ。休んだところでここで殺されればオレもまた家さ帰らいね、と思って、ちょっと休んで、川端だために〝じゃじゃらけかぶ〟があったそうだ。そっちの方さ、これ、攻めていってやると思って、一休みしてまたやったど。戦ったど。そしたっけ、いやぁんべに〝じゃじゃらけかぶ〟さ足引っかけてちょっとつんのめったわけだ。その女がねぇ。それ、親のかたきだって、首ぼろって落としてしまったど。そのがんどの首ねぇ。ところがそうしているこめいに、真っ黒なって闇のようなってしまって、どっちさが行けば西が東かわがらねくなったそうだ。暗くなって。し

たっけ山岸の方に明りっこちょっと見えであるどこあったど。あっこさ行って朝間まで泊めてもらうと思って行ったそうだ。したっけ「今晩は」って言ったっけ、「はい」って年いったおばあさんひとりっこ、居であったど。「オレ今晩秋田の役所まで行ぐと思って来たども、初めての道で暗れして歩がいねし、朝間まで泊めてけれぇ」たけ、「はいはい泊まれ」って。そのがんどの首取ったやず、風呂敷さ包んで背負ってきたもの、上がりっぱさ忘れてそこの家さ上げたっけ、だいの奥の屋敷さ泊めたそうだ。そのおばさんまだ案内してねぇ。困ったどさ泊まった。門弟方いっぱい居でねぇ。「あー、今晩おいの大将遅せな、遅せな」とドヤドヤと帰ってきたわけだ。「ばぁんばぁ、酒沸かせ」って、ドヤドヤドヤと五人も七人も帰ってきたそうだ。困ったどさオレ泊まったど思って、ババ、大っきい鍋さ酒へでぇ、囲炉裏さ火ノンノンめかしてたでぇ。みんな「あー寒び、寒い、今日オレの大将遅せな」ってみんな言うわけだ。その若者がそっくり起きてねぇ、天井の梁渡って、囲炉裏の鍵の上まで来て、酒ちゃぁちゃと沸いできたず、こんど囲炉裏の鍵のロープがブーッツリもいだど。そしたら鍋の酒まがって、みんな火傷なって、そのこまに、ドンと上がりっ場さ降りて、その風呂敷包み忘れったために、それたないで外さちょっと出て、戸っこ、これほんどばり開けて、あどあがらねようにして戸口さぴったり付で、隠れた。その火傷なたったてどうして泥棒だものねぇ。さぁただ許すなって、それ、こうー、さっとここ

まって出てくるわけだ。ひとりんずつねぇ。それ、こうこまってきたじい、はぁ、首ぼろっともいで、ドンとおもてさ投げて、ただ許すなって、若者が言ったそうだ。んだっけ、七人だか八人、切たげったば、あと来ねわけだねぇ。あとしぇば、居ねなぁんど思って、まだ家さ入ってきたど。しだっけ、「笠松峠鬼人がおまつというがんどいるってことオレ聞いできたども、今晩、オメの娘の首もオレ取って来たし、今度オメど戦わねばやずがねぇ」って、その若者言ったそうだねぇ。だっけ、そのお婆さんも七十もなるようなお婆さんで、「おやおや見れば十五、六の若者のようだろう。なかなかいい度胸だって。オレも七十四なっども、んだら、オイどひとつ戦ってみるが」って、そのババ、やっぱりなんぼでも腕利きであったそうだ。そしたどもやっぱり、若者に負けて、炉縁にけつまけて、のめったど、そのお婆さんも。そしたっけ、そのお婆さんの首ももいで、二つまとめて役所さ、金もたないでいったし、首も二つまとめて背負っていって、役所さとどいたっけ、たいーしたほめらいて、褒美いっぱいもらってだと、そうーやしてまず帰ってきて、家さ来たっけ、家の方の役所さも行ったべし、褒美ももらって母と楽に暮らしたそうだ。そいで終わりだ。

堀内ツナ（扇田　83歳）

〈解説〉

『通観』に角館の話として「兄弟の化け物退治」というのがある。兄が三笠峠で若い女を背負って川を渡る途中で殺され、弟が浮き沓を履いて片方が脱げた女を討つ、という話。峠越えという危険な場所の設定、浮き沓という道具の設定が似ている。能代の話は笠松峠であり、川の浅いところと深いところを往復させるという障害物の設定である。ここでは、娘を退治した後、一味の山賊と首魁の姥を退治する話が付いていて、構成が混んでいる。こうした話は各地にあって、場所や障害物の設定にバラエティが生まれ、ストーリーが地域に即した型を取ったものであろう。敵討ちの代償に金持ちになったという余話も付加されている。